

〔寄稿〕

新熊先生への感謝と大学への思い

小松 照幸

新熊先生の退職に当り、深甚なる感謝の気持ちを申し上げます。これまで、折につけNGUの在り方について私の様々な思いを本音で、時にはストレートな感情でご相談して来ましたが、それに対し辛抱強く、そしていつも温かい気持ちと広い心で受けとめて頂きました。お蔭で、どれほど私の教員生活に安心を頂き励まされてきたか、改めて感謝申し上げます。この小文は、創立50周年記念史を執筆される先生に、私から見たNGUの国際交流などを回顧し、今後の行く末を見守って頂くことを切望し記すものです。

新熊先生との思い出

41年前の1971年、第4回派遣交換留学生の選考を兼ねた1ヵ月に及ぶ集中英語合宿を敢行した時のことです。合宿所は、今はもう営業されていない食堂が瀬戸キャンパス正門手前にありましたが、その横の奥の細道に新築された民間学生寮があり、そこで行われました。現在、その場所は更地となり電波塔が立っています。先生と私は、寮の監督として朝晩20数名の学生と寝起きを共にし、日本語を話すものは罰金10円（貯金箱へ）を払い、英語のみで暮らす特訓をしました。先生はまだ講師でいらしたお若い頃で、私が在校生でありながら寮監に選任されたのは、第1回短期交換留学生（1967年）として姉妹校Alaska Methodist University (AMU) に留学し、その後同校3年に編入し、2年後学士号を取得しNGUに復学した経緯からです。

当時合宿に参加した学生は、今はもう60歳前後でしょうが、1か月間、英語漬けで暮らした生活体験は、彼らに相当なストレスを与え、途中何人かは腹痛になる者もいました。しかし、そのようなインテンシブな英語教育によって、外国語学習は実は異文化体験であることを身を以て学ぶ貴重な機会となり、彼らの人生において忘れぬ思い出になっています。そして、このような斬新な英語教育を1960年代後半・大学の出発時点で行った英断とプランを実行した金田正也先生（名誉教授）他に対し深い尊敬と感謝の念を持つものです。そういう意味で、このプロジェクトに新熊先生と参加できたことは、今もって私の誇りとするところです。

私がNGUに奉職した1988年のこと

この年は、大学に念願の外国語学部が新設されました。それと同時に留学生別科も付設され、私は別科の専任講師として母校に赴任しました。この年から、新熊先生が退職されるまでの24年間、先生には同じ大学の教員として、折にふれ、自分の本音をぶっつけましたが、深い気持ちで聞いていただくことになりました。NGUに留学生別科を付設したのは、新学部設置の付帯条

件として、当時の文部省からの指示によるものでしたが、それは同時に、NGUの国際交流を大きく拡大・発展させるための留学生受け皿として機能するものでした。別科では、本格的な日本語教育と日本事情の教育が開始されることになり、新しい外国語学部には多くの新任教員の方々が赴任されました。しかし、国際交流の拡大には生え抜きの金田先生が必要と思われ、外国語学部設置の要の教員であった新熊先生も金田先生の新学部への参加を願って居られたと思います。結局、古巣の経済学部の英語教育を守る信念から、金田先生は経済学部に留まることになられません。先生の去就についてはNGUの英語教育や国際交流にも影響があることから、私にとっても重大な関心事でした。個人的には金田先生は大切な恩師であり、留学中もNGUへの復学や二度目のアメリカ大学院留学や将来のキャリア形成における重要なアドバイスを頂き長い間、大変お世話になりました。

1966年から始まったNGUの国際交流は、1988年を境に新学部増設と留学生別科の設立により、大きく拡大しました。それに伴い新しい局面を迎え、交流に関する組織的な課題、教育プログラムや英語教育などの方向性について新熊先生にはいろいろな示唆を頂きました。

NGU派遣交換留学生の英語力低下に関して

私は教育カウンセラーとして日米教育委員会（フルブライト奨学金）に15年間務めました。そこでは、年間3万件を超える利用者があり、多くの方々のアメリカ留学相談に与かってきました。アメリカへの大学留学希望者はTOEFL Scoreで最低500点は必要であり、大学院留学希望者は550点程度のスコアを取ることは常識的に必要でした。それに対して、NGU留学希望者のTOEFL Scoreは、ごく一部の優秀な学生を除き450点を下回る非常に低い得点者が中心であることに、当初は愕然としました。現在もNGU生のTOEFL Scoreは向上せず、アメリカの学部授業を受講し合格点を取れる学生は、極めて限られています。このことは、NGUの国際交流にとって、派遣できる交換留学生が選べないという深刻な問題です。私が新熊先生に問いかけてきたフラストレーションは、外国語学部ができたにも関わらず、なぜ外国語学部創設期にいたような優秀な学生が育たず、学生の英語力が下降線をたどり続けるのかと言う、率直な心配を投げかけてきました。

今から50年近く前、大学創設期に行われた1か月に及ぶ英語合宿トレーニングや、金田先生が抱いておられた英語によるトータルな生活環境を提供する「アメリカン・ハウス」のコンセプトなど、英語で日常生活を暮らす生活環境が、20年～30年経ってもなぜNGUで具現化しないかなどについて議論しました。私の素朴な疑問は、大学創立期に受けた熱気に溢れた素晴らしい英語教育を思い起こし、学生に対する情熱ある英語教育の伝統が維持向上できていないことへの大いなる不満であり、それは現在でも問題意識として持ち続けています。

新熊先生からの励まし

私は日米両大学の学士課程と修士課程で学びましたが、未だ博士号は取得できていません。NGUの卒業生であり、ただ一人母校の専任教員になりながら、研究者として博士号が取得でき

ていないことは、自分自身にとっても忸怩たる思いがあります。私にとって、新熊先生が日米の大学院から文学で博士号を取得されたことは驚異です。言語能力的には最も困難な文学の分野で、しかも日本語と英語で博士論文を書いて合格した日本人学者が、果たしてどの位いるでしょうか。そのために精進された日々とご努力を考えると、深い尊敬の念を持たざるを得ません。私に残された定年までの期間は後2年です。それまでに目標を達成し、先生からのご厚情に応える努力をいたします。

コンケン大学のこと

NGUにとって、タイのコンケン大学 (Khon Kaen University) は、初めてのアジア地域における大学間教育交流であり、2009年から今日まで13年間継続されています。当初は外国語学部で行われる予定でしたが、諸般の事情で経済学部の私が担当することになりました。私が担当するに至った動機は、NGU創立期の「環太平洋国際交流」のコンセプトを具現化するためでした。これは、NGUと最初の交流協定が行われたアメリカの姉妹校AMUの山本雅也先生（故人、AMUからNGUへの交換教授、歴史学者）が抱いたコンセプトです。それは1960年代から始まった日本の大学の国際交流活動によって、国際化に対応できる高度人材作りが重要と考える先見の明でした。現在NGUの国際交流は、この路線に沿って北米、アジア、東欧、ヨーロッパ、オセアニアの諸大学と交流を拡大するに至っています。

新熊先生とコンケン大学プログラムとの接点は、先生のゼミ生が多く参加し、その教育効果を具に評価頂いたことによります。それまでの短期留学による英語教育や文化学習は、いわば欧米一辺倒であり、アジア地域における交流の重要性が認識されるようになったのは、時代の流れとして必然でありました。欧米諸大学との国際交流と比較し、新しい認識として、アジアでも効果的な英語学習を行い得ること、英語以外のアジアの言語にチャレンジすること、そして馴染みのないアジアの文化を本格的に学ぶことにあります。世界経済の変化と期をいつにし、21世紀はアジアの国々が台頭する時代であり、人材養成の方途としてアジア地域で国際交流を推進することは政治的・経済的・文化的に重要なことです。先生はアジアへの視野に共感され、コンケン大学への引率も希望されておられましたが、在任中には実現しませんでした。今後のチャンスとしてぜひ訪問頂きたいと願っています。

英語学習と研究に関すること

私は2005年頃から、外国語学部の要請により、「日米比較言語文化」の講座を担当してきました。この講義は日本語と英語を言語文化として観察し比較研究しますが、受講生と一緒に、その楽しさと奥深さを学んでいます。新熊先生は英米文学、とくにイギリス文学の大家ですが、その著作を通して膨大な実証研究の重要性を身近に教えて頂きました。言語が文化である観点は、日本の歴史からもその重要性が明らかです。7世紀の大化の改新は、当時最先端の中国文化から膨大な文物を移入し、社会制度改革を筆頭とし、日本文化への影響は大でした。とくに日本語表記における書き言葉の導入は、その後の日本人の思考と行動に決定的な影響を与えました。同様に、明

治時代の先人たちが、欧米の思想を導入するため、どのような努力によって翻訳作業と訳語の創出に努力したかについて、先生からたくさんの蘊蓄を拝聴しました。

最後に

この小文は私の思いを記した散文となりました。Essayでもなく論文でもなく回顧録のような内容で、先生の記念号にはそぐわないかも知れませんが、これまで40年間の思い出を回顧すると、止めどもなくそして脈絡なく様々な関係者や場面が思い浮かんできます。記念号をお読みになる方々には、大変僭越な内容ですが、願わくば新熊先生には、私が何を言わんとしているか、大きなところで受けとめて頂けることを願っております。そして、この機会を頂いたことに改めて感謝いたします。

補足資料

1. 1966年、第1号長期留学生

川島静夫氏(68E, 1期生)。姉妹校AMU: Alaska Methodist University, 現APU: Alaska Pacific Universityへ留学の後、カナダのSimon Fraser University大学院修了。帰国後、外資系・大手証券会社の重役となる。

2. 1967年、第1回NGU短期交換留学生(夏季)

4名、宮野淑子、山内博、小栗直輔、小松照幸

3. 1968年、アメリカの姉妹校AMUから第1回交換留学生3名が来学

3名はGail Kurosaki, Ned Lewis, Roger Lewis。Gailは日系三世で、NedはAMU教育学教授の次男。日本に二度留学し、二度目は文部科学省の国費留学生として京都大学で日本史を学び、現在は高校教師を定年で退職し、アンカレッジで悠々自適の生活を送る。Rogerは、アメリカで最難関と言われる医学・法学の分野で、法学を専攻しオレゴンのLaw Schoolを卒業。そしてNed Lewisの母親(故人)キャロル、Carylは、私にとってはアメリカの母のような存在であり、大の親日家で日本通。後年博士号を取得し、NGU関係者のみならず多くの日本人がお世話になり、民間外交のお手本と言うべき人物。NGUの50年に及ぶ国際交流によって、我々が知りえないスケールで草の根の人間交流が行われている。

4. NGU国際交流政策の実施

1968年、AMUの歴史学教授であった日本人教授・山本雅也先生(故人)が交換教授としてNGUに派遣され、同じメソジスト系大学の縁で、両校の大学間協定による交換留学制度が発足する。交流協定の締結は当時の理事、関西学院大学からの宗教主事、神戸大学出身の碩学達の英断による。

5. 山本雅也先生、最後の講義について。

1968年、私がAMUに学士編入学の後、アメリカに戻られた山本先生の講義(ヨーロッパ史)を受講する。山本先生は持病の心臓病を抱えており、最後のストロークが致命傷になり逝去。亡くなるその日の講義を受ける。講義テーマはルネッサンス期のフランス革命前後の思想的背

景について。日本人である教師が、英語を使って難解な西欧史を語り、言語や人種や文化の壁を超えてアメリカの大学で英語で講義する国際人の姿に、大いなる文化ショックを覚えた。

6. 関西学院大学の国際交流啓蒙書について

関西学院大学が1970年から2年をかけて編纂した啓蒙書。大学の国際交流の必要性を包括的に示唆した日本の大学としては草分けの書物。以下、同書の冒頭文。

「世界的時代の到来、それは現代の最も大きな出来事である。世界は経済、政治、文化のいずれの面でも緊密な連関の中に組み入れられ、民族も個人も世界を離れて存在することは不可能であり、学問も教育も国際的交流を離れて進展することはできない。この世界的時代の到来の中で、真の国際交流とは何か、今日内外の大学でいかなる国際交流が実施されているか、さらに今後いかなる国際交流の道が拓かれるべきか、これら今日の大学の根本問題の検討をここに試みた。」【関西学院広報委員会編『国際交流と大学：世界的時代の課題』関西学院出版、1970】「概要」

第一部：国際交流の理念と歴史的事例—世界と日本

第二部：大学における国際交流の実態—日本の大学、世界の大学

フランス、イギリス、ポーランド、アジア諸国、イスラエル、アメリカ

〈特別シンポジウム〉国際交流と大学

〈永井文部大臣インタビュー〉国際交流への新しい視点

第三部：今後の課題、現在の問題点、外国語教育、可能性をさぐる

7. 60年代と今日の社会変化について

戦後経済の回復と自由主義教育の中で、60年代の学生は団塊世代の直近か先頭集団である。この世代には、もはや現代では流行らない「立身出世」や「故郷に錦を飾る」といった言葉が生きていた。またアメリカ文化を中心とした物質的豊かさや未知なる世界に強い興味と憧れがあった。

他方、現代社会では、仮想現実（Virtual Reality）を現実世界と錯覚し、Walkmanから始まった自分の世界と周りの社会（世間）を遮断して、自分の世界に浸る行動（自己中心的世界）すなわち現実逃避のオタク的人間を生産し続けている。子供の遊びのNo. 1がゲーム機であり、もはや「他人の目」や「世間の目」が意味をなさず、それを無視する集団が増え続け、他者との関係性に破綻をきたす世代が増加し続ける傾向に、ある意味恐怖を感じる。

日本経済がピークであった1990年代は、まさに物の豊かさが総てであるかのような錯覚に陥り、半世紀かけて築いた国富を、いわば一瞬にして喪失した愚かさを、失われた15年として日本人は味わい続けている。それへの反省として、現代社会は物の豊かさだけでなく、生きる意味や深い精神（QOL, Quality of Life）を保障する「心の豊かさ」を取り戻す必要に迫られている。

8. 大学の教育サービスとシニア層との望ましい関係について

2012年9月7日付の日経新聞には、今後の高齢化社会への動向と、60歳以上のシニア層へのマーケティングに関して、示唆に富む記事が掲載されている。NGUがより魅力ある大学作り

を目指す上で、開かれた社会貢献とサービスを提供する方向性を示している。概要は以下の通り。

『シニア層に向けた製品やサービスの開発や提供で成功するには、①対話を通じたニーズの把握 ②つながり ③シニア層が参加できる体制—の3点が重要になる。……（また）米国ではシニア層が退職後の生活を楽しみながら、健康維持を含む総合的なサービスを受けられる大学との連携コミュニティが70ヶ所以上ある。高齢者は大学近くに住み、生涯学習講座で学ぶ一方、自分の経験や専門を生かして大学で講義したり学生に助言を与えたりする。シニア消費の潜在力は高い。製品やサービスを提供する側の工夫しだいで市場はさらに広がる。』【「シニア消費の実態」(三菱総合研究所)】

これからの日本社会において、人口構成の変化、若者の進学人口の減少、生涯教育の重要性、止まることのない人の国際移動などを考慮すれば、NGUの教育プログラムも対象を拡大し、教育内容を時代に即した国際的で魅力的な内容とすることが重要である。